3.15速報

多喜二の文学を語る集い

第2号

編集/日本民主主義文学会
2008年２月１日(金曜日)発行
東京都豊島区南大塚２-29-９
サンレックス202 〒170 - 0005
電話03-5940-6335
FAX 03-5940-6339

祖国の変革と文学

多喜二文学と真剣に向き合う機会に

旭爪あかね

昨年、韓国に夢中の母といっしょに「冬のソナタ」のＤＶＤを二度も観た。ユン・ソクホ監督は、一九五七年生まれ。いまでは、韓国の文化や経済の中心を担っているのは、六〇年代に生まれ、八〇年代の民主化闘争を身をもって体験してきた世代の人々、みずからの手で社会を変えてきた人々である。集いで講演をしてくださる朴眞秀さんは、まさにその世代、一九六五年生まれの文学研究者だ。

イラスト・高山文孝

多喜二の文学を語る集い

かつて知り合った韓国人留学生は、マルクス経済学を学びたかったが、それを研究すると故国に戻って就職できないため、苦渋の選択で経営学を学ぶことにした、と語ってくれた。しかし朴さんは、指導教官に「将来就職に不利ではないか」と心配されながら、多喜二を論文のテーマとすることを変えなかったという。なぜそんなにも多喜二に惹かれたのか。八〇年代後半から九〇年代初頭、韓国の変革期のまっただなかに青春時代を送った朴さんに、多喜二の文学がどのような影響を与えたのか。そのことをとても知りたいと思う。

朴さんのお話は、現在の過酷な日本社会のなかで労働運動に携わっている青年たちのトークと響き合うだろう。そして、つねにあたたかく、しかし冷静な作品批評をされる祖父江昭二さんの講演ともあいまって、この集いはきっと、高度に政治的でありながら優れて文学的な内容のものになるだろう。社会変革の精神的支柱となりうる文学の力について、この機会に、あらためて真剣に考えてみたい。

（ひのつめあかね　作家）

※開催要項は４面に掲載

「多喜二の文学を語る集い」2008年３月15日(土)午後１時開場　１時30分開演
会場:みらい座いけぶくろ(豊島公会堂)
■前売チケット1.500円　当日1.700円

小林多喜二没後75年
3.15大弾圧から80年

１月15日夜、豊島区南大塚の日本民主主義文学会事務所で、第２回「多喜二の文学を語る集い」実行委員会が開かれました。ポスター、チラシ、「3.15速報」など宣伝物も揃いました。新聞紙上などの広告掲載も行っています。しかし、大切なことはおひとりおひとりへの働きかけです。熱情をもって友人、知人を積極的にお誘い下さい。ぜひ前売チケットを手に持って、機会あるごとにはたらきかけを行ってください。電話なりで宣伝材料を請求いただければすぐにお送りします。開催日までわずか２ケ月、急ピッチで前売チケットをひろめて下さい。

朴眞秀さんは、3.15の講演のため、わざわざ韓国から来日します。画期的な講演会です。お聴き逃しのないよう、ぜひ早めにチケットを普及して下さいますようよろしくお願い申しあげます。

多喜二文学の世界性・生命力が勉強できる！

随所に噴出する多喜二的比喩とユーモア

多喜二読み遍歴

土井大助

■ぼくが小林多喜二の名を知ったのは敗戦直後。陸軍の学校から復員し旧制高校に転入学した書籍払底の時世だ。次兄が残した新潮文庫『蟹工船』を見つけたのだ。読み始めて数ページも進まぬうち投げ出した。伏字が多く、暗く重い感じが先に立って音をあげた。

＊　＊　＊

■級友から、多喜二は戦時下警察に虐殺された共産党員作家だときいたが、先行世代への不信は深く、この人生果たして生きる価値ありや否や、ニヒル心情にどっぷりのぼくは、気には止めても強いてその著書を求める気にはなれぬまま、東京の大学に入った。全くのサボ学生だったが、旧友から学生劇団ポポロに誘われ、資本主義は階級社会であり、その矛盾が不合理の根本だと教わって、マルクスやレーニンをまじめに読むようになった。多喜二「一九二八年三月十五日」は頂門の一針だった。拷問小説だと受け取って、お前は耐えられるか！と自問し、確答を得ずに悩む。更に友人に借りて「蟹工船」「不在地主」を読む。

＊　＊　＊

■「東大ポポロ事件」のあと、何とか卒業して生保会社に就職し、メーデー事件に遭遇したり、労働組合に取り組み、強制配転が噂された頃、勇気を得たくて「党生活者」を読む。母との別れの場面が切なく心に焼きついた。当時は、労働運動の実社会で労働者と交流の毎日、多喜二読みにも気合いが入る。配転拒否で懲戒解雇、以後労組の書記約七年。

＊　＊　＊

■妙な拍子で詩を書くようになり、多喜二の評伝なども身を入れて読むようになった頃、日本語教育援助のため中国に渡る。赴任した大連の中国人教師再教育の講義で、テキストに「党生活者」中の一節「母親」があり、その朗読を求められ、読後ハンカチを取り出す中国人女教師を見て、多喜二文学の生命力を再認識した。

＊　＊　＊

■文革で帰国、赤旗文化部記者になる。折柄『定本・小林多喜二全集』刊行中で、「工場細胞」「オルグ」の紹介をする役目を受け、これがぼくの多喜二について書いた最初の作文となった。亡き手塚英孝さんら先達の諸説の受け売りだったが、この全集でぼくの多喜二読みは広がり、数歩深められた。その後幾つかの拙文を書いたが、まだリハーサル段階だ。

＊　＊　＊

■今、ぼくは多喜二文学の比喩と方言、ユーモアについて勉強中だ。「剃刀の刃のような寒気」（「一九二八年三月十五日」）、「納豆の糸のような雨」（「蟹工船」）など多喜二ならではの豊かな生活感・生命力として比喩は随所に噴出している。ユーモアも単なる洒落や場面挿入の工夫などではなく、人生の基本的な明るさとしてまことに多喜二的だと思う。

＊　＊　＊

■今度の集会では多喜二文学の世界性、生命力について勉強できる、と今から楽しみだ。

（詩人）

津田京子さん

司会は劇団民藝の津田京子さん

「多喜二の文学を語る集い」の司会は劇団民藝の女優・津田京子さんに決まった。津田さんは映画、テレビ、舞台などで活躍。今井正監督「小林多喜二」（一九七四年）や「橋のない川」などに出演。舞台「オットーと呼ばれる日本人」など多くの作品に出演している。

舞台監督は劇作家・演出家の津上忠（つがみただし）さん。日本演劇協会専務理事。日本民主主義文学会幹事。劇団前進座座友。作品「五重塔」（幸田露伴原作）、「阿部一族」（森鷗外原作）。「早春の賦　小林多喜二」ほか多数。

民主文学

2007年７月号 話題作所載

定価970円税込〒84円

日本民主主義文学会編集・発行

申込みは電話03(5940)6335

『小林多喜二全集』未収録小説　解説・曾根博義

老いた体操教師　小林多喜二

新発掘!! 多喜二17歳のときの短編

86年のときを経て、今甦る！

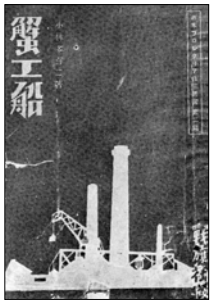
「多喜二の文学を語る集い」が近づいている

現代の若者が読む斬新な「蟹工船」

首都圏青年ユニオン女性組合員とのトーク

浅尾大輔

この「速報」や「赤旗」の広告を読んだ全国の方々から、「楽しみ」「どんな企画になるのか」という声が寄せられている。二月、三月は、小林多喜二さんの文学と人生を振り返る集会が全国各地で行われるわけで、それに加えて東京の「集い」へと高まっていくみなさんのあたたかい期待。私たちは、それに十分に応える準備をしなければならない、そう気を示したいと思っている。おりしも白樺文学館が募集したエッセーコンテストも盛況のうちに若い入賞者が決まったと聞くし、



小林多喜二

は、首都圏青年ユニオンの組合員二人である。いずれも女性。労働者派遣事業の全面解禁や労働基準法以下のひどい企業がまん延している現実を直視してきた仲間たちだ。多喜二さんが「糞つぼ」と表現した労働現場を、いま労働組合という組織をテコにして変えようとしている二人の若い女性が、「蟹工船」を読んだらどんな言葉が飛び出すか……。

小林多喜二さんほど日本国民にこんなに愛されてきた作家はいない。それは、素晴らしい作品群とともに、それらを愛し続ける名もない読み手たちの熱い継承の努力があったからだ。

私は、年配の方々に、いま絶望のうちに倒れようとしている若者たちを物心両面から支えてほしいと訴えたい。まずは「集い」に参加することで、一歩でも二歩でも若者たちに寄り添うことができると訴えたい。乞うご期待。（作家）

持ちを引き締めている。

青年トーク「『蟹工船』を語る」を担当する私は、現代日本を生きる若者たちが、小林多喜二さんの傑作「蟹工船」をどんなふうに読んでいるのか、その一端「民主文学」誌の座談会に参加した作家・雨宮処凛さんの「蟹工船」論も毎日新聞やブログ上で発表されて、この高まる機運のなかで、働く青年労働者が語る斬新な「蟹工船」の読みをぜひ目の当たりにしてほしい。

司会の私とトークするのは、保守系の町長だったが、今井監督と聞き、協力を約束してくれたが、やはり、「天候だけは思うようにはいかない」とあきらめ顔。それでも地元住民や国道の除雪を受け持っている北海道開発局と相談し、ロケ当日の除排雪は臨時的にストップしてくれることになった。

そして、「東倶知安行」に書かれているように猛吹雪が羊蹄山麓を襲い、一九二八年当時の道なき道が再現された朝、山本圭の扮する多喜二らの馬橇の場面の撮影が済んだ。途端、なんと天候急変、それまで何日待っても駄目だろうと思われていた羊蹄山の晴れ姿がロケ隊の眼前に広がった。

私はこのとき、歴史に逆行する圧政の吹雪の中でも、パッと晴れ上がる日が来ることを信じて、多喜二は闘っていたのではないだろうかと思った。

（筆者は日本民主主義文学会会員。現在、東京・東久留米市に在住）

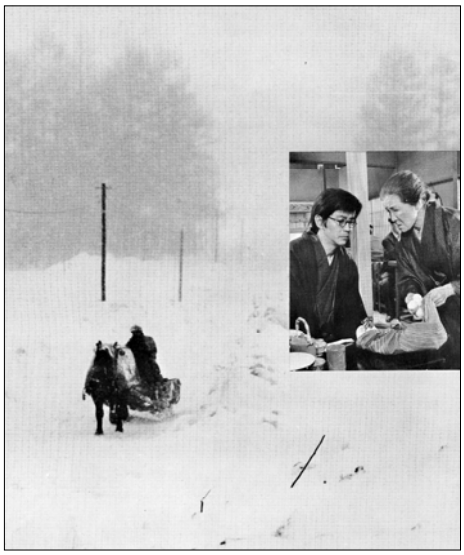
今井正監督「小林多喜二」倶知安ロケ秘話

吹雪のち晴れ

桐野　遼

一九七三年冬に今井正監督、山本圭主演で「小林多喜二」という映画が作られた。その際、今井監督から、「小説に書かれている現地でロケをしたい、是非協力してほしい」との連絡が、当時倶知安町議だった私にあった。巨匠に会えるというだけで単純に喜んだ私でしたが、注文を聞いて、はたと困った。

監督は「綺麗に晴れ上がった冬の羊蹄山を撮りたい、併せて猛吹雪の中を馬橇を走らせたい」というのだ。冬の羊蹄山が綺麗に姿を見せることはほんとうに少ない。


映画「小林多喜二」パンフレットから。1974年

ました。

短い期間に吹雪の場面と両方撮影するというのだから無理な注文だった。困った私は今井監督を役場に連れて行き町長に会わせた。

講談界女性進出の草分け

出身は秋田県横手市

講談といえば、落語と同じく男の世界と決まっていた。そこに女性が進出した。先頭を切ったのが宝井琴桜さんだった。さぞやご苦労が多かったに違いない、と思うが、直接お会いすると、実に若くはつらつとした美しい方である。

今から五年前、小林多喜二没後七十年の年に、大館市で先人顕彰祭という大がかりな催しがあり、招かれて同じ舞台に立った。この時、芸歴三十五年とうかがったが、見れば見るほど勘定が合わない気がしたものだった。

§ § § § §

生まれは秋田県横手市。地元の高校を卒業して上京し就職したものの翌年には田辺一鶴に入門、さらに一年後に五代目宝井馬琴の門に移って琴桜を名乗ったとのことだから、十代のうちに講談界に飛びこんだことになる。

女性で初めて真打に昇進し

講談

小林多喜二の母

宝井琴桜さんのこと

澤田章子

宝井琴桜さん

「与謝野晶子物語」「平塚らいてう」「民権ばあさん楠瀬喜多」など、先進的な女性をとりあげた評伝や、男女共同参画をテーマにした「山下さんちの物語」などが話題にされてきた。社会性のある創作で活躍されてきた講談師なのである。

§ § § § §

「小林多喜二の母」は、三浦綾子の『母』を基につくられたもの。琴桜さんとは同郷の人でもある多喜二の母セキを中心にしながらも、多喜二の生き方、思想の根幹になっている、愛情の深さ、貧しい階級への思いと、貧困のない社会への変革のこころざしをとらえた物語。

§ § § § §

セキや父親の末松の会話が秋田訛りで語られるのも、琴桜さんならではの聴きどころ。切れ味の良い口跡、楽しくてしかも味わいの深い講談「小林多喜二の母」をおたのしみに。

（文芸評論家）

たのも琴桜さん。結婚相手は宝井琴梅さんと、このあたりのことは新聞種になっていたほど、講談界の話題の人だった。現在は講談師の半分は女性になっているという。

§ § § § §

琴桜さんは、古典を語らせたら右へ出るものがないというぐらい、専門家の間では古典ものに定評があると聞くが、

プログラムのご紹介

近代文学の研究者で永年プロレタリア文学を研究されてきた祖父江昭二さんには、「いま多喜二の文学を読む」と題して、日本文学全体の流れの中で、今日、多喜二をどう読むかについて語っていただきます。

曙園大学教授の朴眞秀さんは、高麗大学で小林多喜二をテーマに修士論文をまとめられた、数少ない韓国の多喜二研究者です。一九六五年生まれ、韓国の激動の時代を学生の頃に体験した世代であり、東大大学院にも留学しています。多喜二文学との出会い、八〇年代の韓国などにもふれて、流暢な日本語であますところなく語っていただけるものと思います。

宝井琴桜さんの特別口演「小林多喜二の母」も目玉のひとつです。

作家の浅尾大輔さんを中心とした「青年トーク」では、ネットカフェ難民を生み出しているこの国の現実に重ねて、「蟹工船」を読んで触発される思いを、首都圏青年ユニオンの若い世代がみずみずしく語ってくれることでしょう。

司会は、劇団民藝の津田京子さんです。

定員800名/全自由席

開催日時は、2008年３月15日（土）午後１時30分からで、会場は「みらい座いけぶくろ（豊島公会堂）」です。この日は多喜二が「一九二八年三月十五日」に描いた、3.15大弾圧事件からちょうど80年という日にあたります。ご来場をお待ちしています。

前売チケット発売中！お求めは文学会へ

’08年３月15日（土）開場13時開演13時30分

みらい座いけぶくろ（豊島公会堂）

入場料前売1500円発売中（当日券1700円）

申込み・問合せ／電　話03（5940）6335

（主催事務局）　ＦＡＸ03（5940）6339

みらい座いけぶくろ案内図

■交通案内　JR、地下鉄（丸の内線　有楽町線　新線）西武池袋線　東武東上線 各線池袋駅東口下車徒歩５分。